

政宗殿は優しい。

「幸村、ちよつとこつち来いよ。」

そういって、登下校の時、いつもさりげなく自分の右側に某を呼び寄せる。

必ず車道に近い左側を政宗殿は歩かれる。

某はそれを知りつつも、政宗殿のその優しい所作に心を奪われ、今日もまた政宗殿への想いを強くする。

「今日、泊まるよな？」

「は、はい？」

付き合い初めて早三ヶ月。

週末は政宗殿の部屋に泊まる、ある種の暗黙の了解が出来上がっていた。

そして、そこで営まれるのは間違いなく互いの想いが通じ合っていなければならないこと……。

だが、その振る舞いが普段の政宗と余りにもかけ離れているので、某は未だに戸惑いを隠しきれませぬ。

「オラ、幸村、もっとケツ擦りつけろ。欲しいんだろ？俺の竜がつ。なあ？」

「あつ、あうつ、政宗殿つ、政宗殿おつ」

普段は優しい政宗殿。

だが、閨に入ると一変。

高圧的な態度で某を牛耳り、激しい攻め苦を某に与えるのです。